

プルーストとエミール・マール(3) : 1903年4月のラ ン大聖堂訪問

加藤, 靖恵
名古屋大学大学院文学研究科 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/1495141>

出版情報 : Stella. 33, pp.93-103, 2014-12-24. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

ブルーストとエミール・マール（3）*

—— 1903年4月のラン大聖堂訪問 ——

加 藤 靖 恵

キリスト降誕の門の彫像

ブルーストによる仏訳『アミアンの聖書』の註釈には、ラン大聖堂の南北塔に配された有名な牛の彫刻と西正面のキリスト降誕の門を飾る彫像についての言及があるが、そのいずれもがマールの『13世紀フランス宗教芸術』を下敷きにしていることはすでに触れた¹⁾。

マールは西正面の3つの門のうち、このキリスト降誕の門を最も頻繁に取り上げている。修復による置き換えはあるものの、元の彫刻の多くが博物館等に保存されており、他の門に比べて19世紀以降の新たな創作的要素が少ないといった理由以上に²⁾、図像学的にみて極めて興味深いあまたの細部が彼を惹きつけたのであろう。マールはオータンのホノリウスを引用しながら、アーキヴォルトに彫られた旧約聖書の様々な場面がどれも、タンパンとまぐさ石に見られる聖母マリアの生涯と関連があることを示している³⁾。ブルーストが『アミアンの聖書』の註釈で引用したのは、そのうちの4つの例である——。預言者ハバククが入り口をふさぐ石に貼られた封印を破ることなく、ダニエルが閉じ込められているライオンの洞窟に食物の入った籠を差し入れる挿話は、キリストがマリアの胎内に宿り、この世に生まれでたにもかかわらず、彼女の処女性に損なわれなかったことを象徴する。モーゼが目にする燃える柴は、マリアが自分の内に保ち続ける聖霊の炎につながる。神が周囲の地面を濡らさずにギデオンの敷いた羊皮の上にだけ露を注いだように、マリアは処女でありながら懐妊した。ネブカドネツァル王の夢のなかで、偶像を破壊すべくおのずと山から転がり落ちてくる石は、聖霊の助けのみで聖母の胎内から誕生したキリスト自身を連想させるという⁴⁾。

1903年にランを訪れたブルーストは、実物と比較しながら大聖堂にかんする

マールの記述を確認することに専念したようだ。2年後、1905年の春に、ランについての情報を尋ねるカチュス夫人への返信のなかでも「読むべきものですか？ 本当に私はランのことでは何も思いつかないのです」と断ったうえで、「大聖堂そのものと、当然ですがランにはあまり触れていない、宗教芸術についてのマールの美しい本、その両者にかんする曖昧な記憶」しか述べることができないと断言している⁵⁾。当時マールの著作で出版されていたのは唯一『13世紀フランス宗教芸術』だけであったのは言うまでもない。

1905年春の書簡とマールへの言及

実際、この書簡中のラン大聖堂の描写は、マールの記述に依るところが極めて大きいことは、以下の表によっても明らかだろう――

ブルースト 1905 年の手紙 ⁶⁾	『13世紀フランス宗教芸術』(1898)
建築様式の新鮮さ。「緑芽はまだ開いていない」、「後に満開となるゴシックの最初の開花」	「最も古いカテドラル」の「若さの印象」。「13世紀に芽が開いて葉をのばす。13世紀終わりから14世紀の間は枝全体、バラの茎、ぶどうの小枝がポーチの周りにはりめぐらされる」(p. 73)
西正面北窓彫刻と北翼廊バラ窓の自由7科：「胸の前に梯子が置かれた哲学、目を天に向けて天文、コンパスを持つ幾何、指で数えている算術、ずる賢い蛇を伴う論理」、「非常に美しい」建築、「病人の尿を調べるランスのもの」とちがって、非常に平凡な」医学	「蛇」を伴う論理 (p. 113 と fig. 30)、「指で最も困難な計算をする」算術、「コンパスを手にした」幾何 (p. 114)、「目を天に向けた」天文 (p. 115)、「胸に梯子を立てかけた」哲学 (p. 124 と fig. 33)、「医学はランスでは「病人の尿を調べている」(p. 127)、「両膝の上に板を置き、設計図を描いている男の姿をした建築」(p. 127, n. 5)
西正面北門アーチヴォルトのエリュトライのシビュラ	pp. 433-434
西正面南門の賢い処女と愚かな処女	pp. 259-260 et p. 490, n. 1
西正面北門で「聖史によって聖母の生涯が先取りして語られている」。『アミアンの聖書』p. 326、訳者註への参照。	pp. 197-203

ブルーストは続いて後陣の13世紀初頭制作のステンドグラスについて記述する――

ブルースト 1905 年の手紙	『13 世紀フランス宗教芸術』(1898)
「マリアの処女性を確認しようとする産婆の伝説が表象されるのはこの作品がおそらく最後だろう」(南ランセット窓) ⁷⁾	「ランとル・マンのステンドグラスは 13 世紀初期である。これ以降、産婆の伝説は我々の大聖堂には見られなくなった」(p. 277)
「非常に奇妙な魚が一匹、最後の晩餐を飾っている」(中央ランセット窓)	「主の前には一匹の魚をのせた皿がおかれている」(p. 298)
「善き泥棒が(なぜ?) エジプト逃亡に付き添う」(南ランセット窓)	「ラン大聖堂の後陣(右手)のステンドグラスに、善き泥棒の挿話が見られる。エジプト逃亡は実にとっぴな表現がされている」(p. 287, n. 1)
「芸術家は復活したキリストを表すことをためらった(これはいかにもロマネスク的だ)。聖女たちが墓のところで泣いている姿だけが見られる」(中央ランセット窓)	「初期の芸術家たちは墓からキリストが出る神秘的な場面を表すことをためらった、なぜならば福音書にはその記述がないからだ。彼らは墓のところの聖女たちを描くにとどめた。13 世紀にもこの古い表現様式が残っている」(ランの後陣のステンドグラス)(p. 254, n. 2)
「処女マリアと受胎告知の天使の間におかれた美しい花瓶」(南ランセット窓)	

フィリップ・コルブによると、ブルーストが 1899 年に友人ロベール・ド・ビイから借りたマールの著作を最終的に返したのは、4 年後の 1903 年のことだったようだが⁸⁾、1905 年の手紙でも同書の本文のみならず註に至るまで詳しく言及していることは、じつに驚くべきことである。

『13 世紀フランス宗教芸術』第 2 版を巡って

しかしながら前掲の表のうち、最後の受胎告知の場面に登場する花瓶にかんしては、ブルーストが読んだとされる版には直接の記述がない。たしかにマールは受胎告知において「処女マリアと天使の間の花瓶」から伸びる「茎の長い一輪の花」に注目し、これは「13 世紀の数多くのステンドグラスにおいて」見られ始めた「象徴的な細部」として書いている。だが、1898 年の初版でその例として挙げられているのはサンスとブルジュのみである⁹⁾。興味深いことに 1902 年の第 2 版では、これに加えてラン大聖堂後陣のステンドグラスにも言及され、さらに A・フロリヴァルと E・ミドゥ著の『ラン大聖堂のステンドグラス』より転用した該当箇所の図版が挿入されている¹⁰⁾。同版での加筆を下線

で示す——

花は13世紀の多くのステンドグラスで見られるようになった。ここではラン大聖堂 (fig. 97) とサンスとブルジュを挙げておこう。¹¹⁾

コルブの調査をもう一度見直してみよう。プルーストが1899年にビイから借りたのは前年に出た初版のはずである。イリノイ大学には、アントワヌ・ビバスコに同書を貸すよう依頼する書簡が所蔵されている。日付は1904年とあるものの、コルブは便箋や記述表現の分析により、1901年10月に書かれた手紙であると推定している¹²⁾。彼はビイがマールの本を「約4年間貸した」と言明している点を踏まえて、プルーストが本を一旦返却後、1901年秋にビバスコからではなく、ビイから再度借用したと推測しているのである¹³⁾。現在知られているその他の書簡からは、これ以降、プルーストが読んだ版についての情報は得られない。とはいえ、後に作家が1902年の第2版を手にとった可能性は皆無ではあるまい。

ちなみにマールは第2版では産婆にまつわる伝承の説明にも、前出の『ラン大聖堂のステンドグラス』から、横たわる MARIA と幼子イエスを抱く産婆を配したラン大聖堂のステンドグラスの図版を新たに転用している¹⁴⁾。

「最後の晩餐」の食卓と魚

次に「最後の晩餐」を表したステンドグラスにおいて、プルーストの関心を引いた「非常に奇妙な魚 «un poisson fort singulier»」をとりあげよう。中世におけるこの主題の例としてマールが挙げるのは、ブルジュ、ラン、トゥールのステンドグラス、国立図書館所蔵の13世紀写本 (latin. 1077)、同14世紀写本 (NAL 1392)、クリューニ美術館蔵13世紀リモージュ産金銅版である¹⁵⁾。ランの13世紀制作のステンドグラスでは、食卓の両端に魚が一匹のった皿が置かれ、食卓の手前にひとり座ったユダが、左端に座すイエスの前におかれた魚の尾に左手をかけている〔図版1〕。ブルジュのステンドグラスとクリューニ美術館の金銅版では、ユダの手は魚の頭を掴み、トゥールのステンドグラスではイエスの手から魚を受け取っている。ランのステンドグラスのモチーフはプルーストが強調するほど奇異なものではない。おそらく彼の脳裏には、マールの以下の記述があったのではないか——

図版1 最後の審判. ラン大聖堂 13世紀ステンドグラス (A. de FLORIVAL et E. MIDOUX, *Les Vitraux de la cathédrale de Laon*, troisième fasc., chap. IV, gravure mise entre les pages 10 et 11).



図版2 最後の審判. ラン大聖堂 19世紀ステンドグラス (部分) (cliché des collections James Paulmier)

図版3 テオフィロスの奇蹟. ラン大聖堂 (Jacqueline et Frédéric DANYSZ, *Lecture naïve de l'ancienne cathédrale Notre-Dame de Laon*, Laon: Impr. du Courrier de l'Aisne, 2012, p. 165).



イエス・キリストと使徒たちは食卓の一方の側についているのに対し、ユダだけが別側にひとりいる。主の前には一匹の魚がのせられた皿がおかれている。この主題は3、4世代にまたがる職人たちによって非常に厳格に守られており、極めて多種多様な芸術作品において極めて忠実に再現されているので、今では記録をとどめないなにか民間の伝承があったのだろうかと思うほどだ。¹⁶⁾

実際にマールがこの場面に魚を描く伝統に関心を持っていたことは、フランス学士院図書館の所蔵する『13世紀フランス宗教芸術』執筆時の草稿メモにも明らかである。「魚」の語にマールの手で下線が引かれ強調されている――

芸術的クレド

最後の審判 ユダ一人が食卓の手前に（ブルジュユ）、そしてシャルトルでは魚に手をかけている。

トゥール（pl. VIII）ユダはいないが、食卓の上に魚が一匹のせられている。¹⁷⁾

また、1922年出版の『12世紀フランス宗教芸術』では、魚の主題の歴史が詳述され、シャルトル大聖堂を飾る12世紀のステンドグラスの図版が掲載されている¹⁸⁾。これについてもやはり草稿に備忘が残されている――

ロマネスク美術 […]

ヴェルダン祭壇 […]

……最後の審判 ユダが背後に魚を持っている¹⁹⁾

クリューニ

最後の晩餐

サントのオ・ダム修道院の玄関のひとつ、アーキヴォルトに見られる最後の晩餐（イエス・キリストが魚を一匹持っている）

B.n tome 10²⁰⁾, p. 487²¹⁾

マールが度々図版を転用した前述の A・フロリヴァルと E・ミドゥ著『ラン大聖堂のステンドグラス』では、この場面の魚は「過越の羊よりも好んで描かれるが、これは古代と異なり、盛大な食事の象徴ではなく、キリストの象徴として広く用いられている」と説明がある²²⁾。マール自身も『12世紀フランス宗教芸術』では、「最後の晩餐」の場面で魚を描いた最古の例として、ラベンナのサンタポリナレ・ヌオヴォ聖堂のモザイク画（6世紀）を取り上げ、初期キ

リスト教では、キリスト＝神秘の魚とされ、食卓にのぼる魚は使徒たちに自らの体を与えるキリストを連想させると解説している²³⁾。近年はドミニック・リゴの『主の食卓——イタリア・プリミティブ派における聖体の奇蹟』のなかで、最後の晩餐の魚の主題はまず北イタリアで広まった後、13世紀には中央イタリア、とりわけフィレンツェで頻繁に用いられ、14世紀には子羊が主流になり、15世紀半ばにはそれが定着した後も芸術家たちは魚の皿も併せて描き続けたと書かれている²⁴⁾。

『13世紀フランス宗教芸術』より先に引用した箇所では、マールはこの伝統がかくも忠実に継承されていることに好奇心を示している。ランのステンドグラスの「最後の晩餐」の場面は、格別特徴があるとは言えないが、魚の表象にブルーストの目が惹き付けられたのは、やはりマールの記述が頭にあったからだろう。

ところで、同じ大聖堂にもう1枚、「最後の晩餐」の場面を描く別のステンドグラスがある。南側廊奥、聖霊のチャペルのランセット窓のほぼ中央に、食卓の手前側に屈んで魚を両手に抱え、正面を振り向いて目配せをするユダの姿が描かれているのだ〔図版2〕。こちらの方がユーモラスで独創的であり、皿にのせられたものよりも数倍大きなその魚は、まさに「非常に奇妙」といえよう。しかし、このチャペルのステンドグラスは19世紀になって新たに制作された作品であり、マールは全くとりあげていないため、ブルーストがこれについて言及しているとは通常考えにくい。

『13世紀フランス宗教芸術』の註では、同大聖堂のステンドグラスに見られる別の魚も紹介されており、これはブルーストも読んでいるはずだ。後陣北ランセット窓の「テオフィロスの奇蹟」には、テオフィロスのところに庶民たちが板にのせた大きな魚を献上する場面がある〔図版3〕。この挿話についてマールは、『黄金伝説』、オータンのホノリウスの説教、マルボドやロスヴィータによるテオフィロスへの献詩、ジャンブルーのシゲバルトゥスの年代記など、いずれの文献にも見られないと言明している。しかし同じモチーフが、ポーヴェ、トロア、ル・マンには確認されることから、マールはこれが「工房の伝統」によるものと推測している²⁵⁾。

註における言及に過ぎないが、これについても草稿メモが残されている——

テオフィロス伝

[…]

ラン, ボーヴェ, [ル・] マンで, テオフィロスは魚を受け取っている。²⁶⁾

聖母テオフィロスの奇蹟

ル・マン, 聖母のチャペル, 13世紀, […] テオフィロスに捧げられる魚, ボーヴェにも見られる。[…]²⁷⁾

ノートルダムの奇蹟テオフィロスの物語

ラン 左ランセット窓

テオフィロスが司教の臣下たちの挨拶を受ける, 彼らは魚を1匹差し出している。
[…]²⁸⁾

ここでは転写を省いたが、マールの記述には複数の参考文献が付記されており、彼の関心のほどが窺い知れる。

1905年のカチュス夫人宛書簡でプルーストが言う「非常に奇妙な魚」とは、単に13世紀に制作された「最後の晩餐」のステンドグラスだけでなく、同聖堂内の他の2作品の記憶も混ざっている可能性はないだろうか。彼自身、ランおよびマールの記述については「曖昧な記憶」しかもっていないと認めていることはすでに見た通りである。

『失われた時を求めて』におけるラン大聖堂

ラン大聖堂が小説に現れるのは2度だけである。主人公は「コンプレー」では、ジルベルトが「大聖堂のポーチ」の前で「彫像のそれぞれの意味を説明してくれる」ところを空想し [I, 99], スワン家近くのメゼグリーズの野原では、彼女が「数日間の滞在のためにランに頻繁に行く」ことを思い出し、地平線から吹き来る風が、かの地より彼女の伝言を運んでくれると想像する [I, 143]。『ラン』という固有名詞は、元々「シャルトル」となっていたのが、1911年から1912年にタイプ原稿が修正された折、書き換えられたものである²⁹⁾。

さらに1913年にはランのいっそう詳しい描写が、『ゲルマントの方』のタイプ原稿に加筆される³⁰⁾ ——

[...] ランの丘の上には大聖堂の外陣がアララト山頂のノアの箱船のように置かれ、その上をいっぱい占める族長や義人たちは窓のところで不安げにかがんで神の怒りが収まったかどうかを伺おうとしており、積まれたありとあらゆる種の植物は地に繁茂することになっており、箱船を一杯にしている動物たちは塔のところまで逃げ出し、そこでは牛たちが平和そうに屋根の上を散歩している [...] [II, 313-314]

ノアの箱船の比喩は、『13世紀フランス宗教芸術』中の「自然の鏡」にも見られる。ゴシックの大聖堂で動植物のモチーフが多く用いられるのは、中世の彫刻家が教会こそが「すべての被創造物を迎え入れる箱船」と考えていたからだと言われる³¹⁾。ところで、マールのこの著作では様々な宗教建築の細部にかんする詳細な分析に少なからぬ頁が割かれるものの、ラン大聖堂の遠景は描かれていない。高い丘にそびえるこの巨大な建造物は、周囲の広大な平原を見晴らしており、同地に到着した旅人の目を真っ先に奪ったはずである。引用した『ゲルマントの方』の描写には、1903年の作者によるラン訪問の実体験が反映されているかもしれないが、しかしその風景描写にはインスピレーションの別の源泉が存在した可能性もある。そのひとつがランにかんする絵葉書である。1905年6月のカチュス夫人宛書簡には、ブルーストが彼女からランの絵葉書を受け取った事実が確認できる（とはいえ絵葉書そのものは残っておらず、どのような風景かはわからない³²⁾）。もうひとつの着想源はマールそのひとである。ブルーストは1906年8月以降、文通のみならず、彼の自宅を訪問して直に教えを請うようになっていた³³⁾。したがって、ランの大聖堂が建造物としていかに壮大であるかを、彼の口からブルーストが聞き知った蓋然性はけっして低くないのだ。じっさいマールは1917年出版の著書『中世のドイツ芸術とフランス芸術』の中で、「すばらしい教会が建てられたアクロポリス」と表現しつつ、「ラン大聖堂は山頂にその7つの塔を聳えさせ、その雄大な詩情には地平線と風と雲とが混ざっている」と述べているのである³⁴⁾。

結語

『アミアンの聖書』の訳注と1905年の書簡を検証した結果、ブルーストが『13世紀フランス宗教芸術』を非常に丹念に読み、実際に教会を訪れた際にマールの記述と現物とを細かく照らし合わせた次第が改めて確認できたと思う。シャルトルやバリのノートルダム等と比べると、たしかにランについては作家が私

的な見解を述べたり、作中に採り入れたりする例は稀である。しかしながら『失われた時を求めて』の執筆過程の後期にあってプルーストがこの大聖堂にかんする記述を2カ所だけとはいえ敢えて加筆した事実、1903年のラン訪問の印象が彼にとっていかに強烈なものであったかが窺い知れるのである。

註

- *) 本論は、2014年12月刊行予定の *Bulletin Marcel Proust* に掲載が決定している拙稿「Proust et Émile Mâle (suite) : la cathédrale de Laon」を一部踏襲している。なお以下の論述において『失われた時を求めて』からの訳出引用はブレイアッド新版 (Marcel PROUST, *À la recherche du temps perdu*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 4 vol., 1987-1989) に依り、該当箇所の巻数およびページ数を本文中 [] 内に示す。
- 1) 拙論「プルーストとエミール・マール (2) ——シャルトルとラン大聖堂における聖母の魂を運ぶ天使の彫像」, 『ステラ』第32号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 2013年12月, 199頁参照。
 - 2) 前掲拙論, 197-198頁参照。Voir aussi Iliana KASARSKA, *La Sculpture de la façade de la cathédrale de Laon : eschatologie et humanisme*, Paris : Picardie, 2008, pp. 132-133.
 - 3) Émile MÂLE, *L'Art religieux du XIII^e siècle en France*, Paris : Ernest Leroux, 1898, pp. 197-203.
 - 4) John RUSKIN, *La Bible d'Amiens*, traduction, notes et préface de Marcel PROUST, Paris : Mercure de France, 1904, p. 326, n. 4.
 - 5) *Correspondance de Marcel Proust*, texte établi, présenté et annoté par Philip KOLB, Paris : Plon, 21 vol., 1970-1993, t. V, p. 124.
 - 6) *Ibid.*, pp. 124-125.
 - 7) 産婆を表すステンドグラスは2枚あり、そのうち1枚についてはすでに触れた——拙論「エルスチールとエミール・マール——プルースト草稿カイエ34の再検証」, 『ステラ』第30号, 2011年12月, 228-230頁参照。ただし、そこでは「ラン」ではなく「ラオン」と表記した。
 - 8) Philip KOLB, «Marcel Proust et Émile Mâle (lettres la plupart inédites)», *Gazette des Beaux-Arts*, n° 108, 1986, p. 75 ; *Corr.*, II, n. 5 de la page 456.
 - 9) Émile MÂLE, *op. cit.*, p. 319.
 - 10) A. de FLORIVAL et E. MIDOUX, *Les Vitraux de la cathédrale de Laon*, Paris : Librairie archéologique de Didron, 1882, planche IX.

- 11) Émile MÂLE, *L'Art religieux du XIII^e siècle en France*, nouvelle édition revue et corrigée, Paris : A. Colin, 1902, p. 286.
- 12) *Corr.*, II, p. 456 et la note 1.
- 13) Philip KOLB, « Marcel Proust et Émile Mâle (lettres la plupart inédites) », *Gazette des Beaux-Arts*, n^o précité, p. 75 ; *Corr.*, II, n. 5 de la page 456.
- 14) Émile MÂLE, *op. cit.*, p. 247, fig. 86 ; A. de FLORIVAL et E. MIDOUX, *op. cit.*, planche XI.
- 15) Émile MÂLE, *L'Art religieux du XIII^e siècle en France*, éd. précitée de 1898., p. 298, n. 1.
- 16) *Ibid.*, pp. 297-298.
- 17) MS 7613, f^o 299 r^o.
- 18) Émile MÂLE, *L'Art religieux du XII^e siècle en France*, Paris : Armand Colin, 1922, pp. 110-112.
- 19) MS 7624, f^o 185 r^o.
- 20) *Bulletin monumental*, publié sous les auspices de la Société française d'archéologie pour la conservation et la description des monuments historiques, t. 10, Paris : Lance ; Rouen : Frère ; Caen : Marie-Viel, 1844.
- 21) MS 7624, f^o 866 r^o.
- 22) A. de FLORIVAL et E. MIDOUX, *op. cit.*, chapitre IV, p. 10.
- 23) Émile MÂLE, *L'Art religieux du XII^e siècle en France*, éd. citée, p. 111.
- 24) Dominique RIGAUX, *À la table du Seigneur : l'Eucharistie chez les Primitifs italiens (1250-1497)*, Paris : CERF, 2007, pp. 230-231.
- 25) Émile MÂLE, *L'Art religieux du XIII^e siècle en France*, éd. citée, p. 332, n. 1.
- 26) MS 7613, f^o 275 r^o.
- 27) MS 7613, f^o 303 r^o.
- 28) MS 7613, f^o 310 r^o.
- 29) I, 1167, variante c de la page 143.
- 30) II, 1528, variante a de la page 314.
- 31) Émile MÂLE, *L'Art religieux du XIII^e siècle en France*, éd. citée, p. 39
- 32) *Corr.*, V, pp. 191-192. 日付はコルブの推定による。
- 33) Voir *Corr.*, XVII, p. 540 sqq.
- 34) Émile MÂLE, *L'Art allemand et l'art français du moyen âge*, Paris : Armand Colin, 1917, p. 131.